

成年アスペルガー症候群被診断者自身による体験事例研究会の発話分析から推量される定型発達（健常）者のコミュニケーションに内在するイロジカル性の検討

Illogicality in Neurotypicals Communication Clarified through Talk Transcript Analysis of Discussion Group by Person with Asperger Syndrome Disabilities

大山恭史¹ 池田望²

Yasushi Ohyama¹ and Nozomu Ikeda²

¹産業技術総合研究所 生物プロセス研究部門（北海道センター）

¹Advanced Industrial Science and Technology (AIST), Hokkaido center,

²札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学第二講座

²School of Health Sciences, Sapporo Medical University,

1. はじめに

本研究は、アスペルガー症候群当事者（以下、「AS 当事者」と表記する）同士がコミュニケーション・ギャップの実体験やそれらへの対応の方略について話し合った会話内容から、一般的発達を経た人々（以下、これらに対し「健常者」という用語を使わず、「定型発達者」と表記する）のコミュニケーションの特徴を探索する試みである。

アスペルガー症候群は、広汎性発達障害の一つで、言語発達の遅れ等の知的障害を伴わない人々に対し診断される呼称である。

アスペルガー症候群のコミュニケーションに関わる特徴として、インターネット上の一般向け医療情報や、成書で多く挙げられているものに、

- 対人関係が不器用である
- 相手の感情が理解できない

といったものがある。

これらの記述を始め、広く目にされるアスペルガー症候群についての説明の殆どが、定型発達者の側から観察された様相を言語化したものである点に留意する必要がある。

例えば定型発達者に向けた AS 当事者との接し方に関する様々なアドバイスは、コミュニケーショントラブルの原因が AS 当事者側の障害特徴にあるとし、それへの配慮を示すものが多い。このような偏在した原因帰属を前提とするのは、一部は事実であるものの、両者のコミュニケーションの在り方を、定型発達者が検討していることでバイアスが働いて

いる要素も無視できないと著者らは考える。

本研究では、札幌市において AS 当事者同士が月例で行っているコミュニケーションに関する体験事例研究会の会話記録を、形態素解析などのテキスト分析法を用い、定型発達者のコミュニケーションに内在する、トラブル因子になる可能性のある脆弱性について検討した。

なお、本研究は、札幌医科大学倫理委員会の承認を得て行った。

2. AS 当事者による研究会について

2.1 会の概要

著者らの研究グループは、2010年9月から、札幌市内に在住する成年アスペルガー症候群当事者が参加する研究会（名称「ASD 研究会」）を運営、サポートしており、現在も継続中である。

当会は月に一度、札幌医科大学を会場として開かれている。会員として登録している AS 当事者は 7 名（35 歳以下。平均年齢 31 歳）である。会話録のために音声録音しており、この音声から個人情報削除したデータをアスペルガー AS 当事者の社会生活に資する研究に使用することについて、参加者の了承を得ている。

Table 1 に、各回で話し合われるテーマの例を示す。ここでは、2011 年度のものを記載した。

Table 1 Theme of ASD Working-group: Examples in FY2011

他人の気持ちをどう読んでいるか
頭のスイッチ
昔はできなかった（わからなかった）けれど、今はできる（わかる）こと
親との関係について
セルフコントロール
相手と気持ちや考えを共有すること
表情を読む
集団の中の孤立
時間の感じ方
親密な付き合い
葛藤（欲求と理性）

2.2 発言レコードの例

本研究では、研究会で交わされた自由会話音声テキスト化して、ある参加者が話し始めて次の参加者が返答するまでを1レコードとしている。

いくつかのレコードの例を Table 2 に示す。なお、これらは独立して抽出したもので、互いに前後とは会話の関係がない。

Table 2 Record samples (in FY2011)

知識の部分では、止めようと思わない。明らかに違うことを言っていると、テレビを殴りたくなる。けれど、コントロールできるようになった。経験から。コントロールしないと、自分の精神がまずくなっちゃうから、コントロールできるようになった。あとは、長男気質みたいなもの。困っている人がいると、助けなくなっちゃう。それで相手もぎちぎちになっちゃうくらいやってしまう。おせっかいも善行のうちと思っている。相手と話して妥協しながらやっつけばよいのかなと思う。オタクの部分と、アカデミックな部分と、長男気質の3つかな。
自分でどうにかできることは1割くらいで、残り9割くらいは何でも起こりうると思っている。あとは人に感謝して、ありがとうとごめんなさいを言うくらい。
アスペルガー症候群と言うのは、自分がつけたので

はなくて、つけられたものだから、そういう属性はあるんだろうと思っている。黙っていても、属性が決まることはあると思うんですよ。選べない属性を決め付けられることで孤立することはあると思うんですよ。仕事していないからニートとか、家にいるから引きこもりとか。役に立とうがたたないが存在しているから、そういわれると辛い。その属性が違う人たちがうまくやっていくためにはどうするかということだと思っんですよ。

「早く帰ってきてね」とかは何時に？というのがわからなくて困る。

用事自体が何時までかかるかがはっきりしないから、「9時より遅くなるなら電話して」と言われる方がらく。

3. 発言の分析方法

本研究では、録音された2011年度の研究会（全12回、およそ24時間）の音声データを基にし、1発言1レコードとするテキストデータ、各レコードを形態素に分解した形態素データの二つを、目的に応じて分析対象データとした。両データを作成する手順を Fig. 1 に示す。

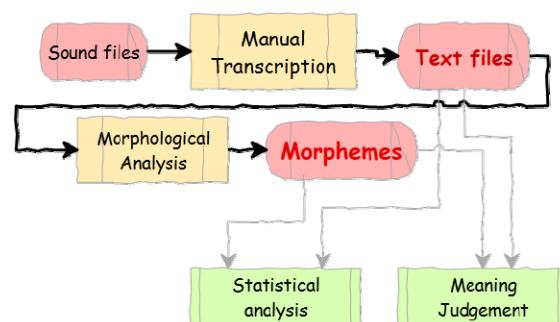


Fig. 1 Procedure of Data Extraction from Sound Data

音声のテキスト化は人間による作業で、別の解析者による1回以上のスクリーニングを加えて精度を上げた。形態素解析には、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座によって公開されている形態素解析器「茶筌」を用いた。

得られた形態素の統計処理にはR言語を用いた。また、レコードの表意による取捨選択は、Observation, Assessment, Considerationの三相について情報の有無を[0, 1]でスコアリングするフラグ型の判定法を導入し、解析者の主観を排除したレコード抽出と分析をおこなった。

